

主な内容

特集—— 連載 当院認定看護師の紹介 No.14

トピックス—— 学校法人岩手医科大学が第72回岩手日報文化賞を受賞しました

フリーページ—— すこやかスポット医学講座No.89

「特発性血小板減少性紫斑病とは」

表紙写真：医大祭2019『たかが「僕」、されど「僕」。』（関連記事P.5）



連載

## 当院認定看護師の紹介 No.14

平成9年に県内初の認定看護師が本学附属病院から誕生して以来、当院では現在、18分野48名の認定看護師が活躍しています。認定看護師は、自部署はもちろん、他部署に出向き分野に特化した知識・技術を活かして、実践・指導・相談に応じることで、院内全体の看護の質を向上させています。今回は脳卒中リハビリテーション看護認定看護師と透析看護認定看護師について紹介します。

脳卒中リハビリテーション看護認定看護師

西6D病棟 主任看護師 鈴木 由美子

### ◆ 脳卒中リハビリテーション看護認定看護師の役割

矢中新病院への移転とともに、県内初のSCU（Stroke Care Unit）が開設されました。SCUは脳梗塞のため血栓溶解療法や血栓回収療法を施行した患者さんや、脳出血発症直後などの超急性期の患者さんを対象としています。私は認定看護師として、患者さんが住み慣れた地域に戻れるよう、入院直後から多職種と連携したリハビリテーションを安全に行い、ADL（日常生活動作）の向上とQOL（生活の質）の維持を目標に支援しています。また、急激な発症で不安をもつ患者さんやご家族にとって、後遺症をもちながらも再び一緒に生活できるように支援することも重要なことです。回復期リハビリテーション病棟も開設され、急性期から回復期に至るシームレスな看護が提供できるようスタッフの育成や体制を整備し、横断的に活動していきたいと考えています。



### ◆ 院内外の活動

一人でも多くの患者さんが在宅で生活できることを目指し、合併症を発症せず回復期に繋げることを目標に活動しています。ICF（国際生活機能分類）に基づき、機能障害の回復のみに重点を置くのではなく、能力障害や社会背景を総合的に把握して支援することが重要です。生活の再構築のため、障害に合ったリハビリテーションを日常生活に取り入れながら患者さんの想いに寄り添った看護を提供できるよう、現在新設されたSCUの体制整備を進めています。

また、脳卒中の再発の原因として内服の自己中断や生活習慣病が多いため、自宅退院する患者さんには脳卒中予防十か条、疾患の知識と日常生活に対する注意事項、FAST（脳卒中の初期症状とその対応を示す標語でFace, Arm, Speech, Timeの頭文字）などを退院時にお伝えし、再発予防に努めています。



### ◆ おわりに

矢中新病院にSCUが開設され、県内の脳卒中患者さんの超急性期医療に携わることになります。命とQOLを守ることができるよう、的確なアセスメントに基づいた根拠のある看護実践と、多職種と連携した早期リハビリテーションを実施し、患者さんご家族が満足できる専門性の高いケアを提供していきたいと思えます。

## ◆透析看護認定看護師の役割

我が国では高齢化が進み慢性腎臓病（以下CKD）患者数は約1,300万人になっています。その中で、透析患者さんは全国で約34万人であり、岩手県内では約3,200人（2017年）が透析治療を受けています。透析患者さんは、複雑な体外循環により著しく身体の変調をきたしやすく死への恐怖感を抱くことがあります。また、生涯にわたって透析治療を継続するために時間的な制限が多く、社会的役割を果たすことが難しくなります。さらに日常生活では、ご家族や仲間からの孤立感や疎外感などを感じ、自己の存在価値をも揺るがす喪失体験をしています。私は透析室で勤務し、透析患者さんに関わる中で、日々透析治療を受けながらも元気に毎日の生活を送ることができるよう、患者さんを支援したいと思い、透析看護認定看護師を目指しました。

透析患者さんが元気に日常生活を送ることができ、体調がコントロールされている状態を維持していくためには、患者さんご自身が自らの力量で自己管理を行うことが重要となります。その自己管理の中で、患者さんが苦勞することのひとつに体重コントロールがあります。患者さんが行う食事の工夫や体重コントロールに対する思い、患者さんご自身の価値観を共有し、患者さんが自身を認めていくことが必要となります。そして患者さんが置かれている状況や課題を共に考え、継続できる方法と一緒に見つけ、実行できるような支援を心がけています。

当院は透析実習施設でもあり、岩手県内からも多くの実習生が来ています。実習生への指導を鑑みて部署及び院内の透析に携わる看護師の育成が望まれます。透析看護師の育成とキャリアアップの推進が私の大切な役割であると考えています。



## ◆院内外の活動



移転に伴い矢中新病院ではベッド数が15床となり、腹膜透析室も整備されました。院内では病棟を対象に血液浄化法と看護についてスキルアップを図っています。また、主に透析患者さんのシャント管理について、シャント閉塞に関する勉強会の依頼や相談を受け、病棟看護師への指導を行っています。院外活動では、岩手腎不全研究会と岩手県CAPDナースセミナーの一員として腎不全及び血液・腹膜透析の普及と地域連携に取り組んでいます。また、高齢化社会の中でCKD患者も増加している近年、患者さんが早期に受診し、早期の治療が開始され、透析予防に繋がることを目標に地域への情報を発信し、岩手県内3名の認定看護師と共に普及と教育活動を行っていきたいと思います。

## ◆おわりに

透析患者さんの取り巻く環境やニーズは多様に存在します。患者の個別性を踏まえて、それらの情報を整理し、安全・安心な透析治療を提供し続けていきたいと思っています。

## 大学報原稿募集

岩手医科大学報は、教職員皆様のコミュニケーションの場として発行を重ねていますが、さらなる教職員同士の“活発な意見交換の場”として原稿を募集しています。

岩手医科大学に対する意見や提言、日々の業務で感じること、サークル紹介、学報への感想など、幅広くお受けします（表紙写真も募集しています）。

また、特集してほしいテーマや、各コーナー（「表彰の栄誉」「トピックス」「教職員レター」など）への掲載依頼などお待ちしております。事務局までご連絡ください。

連絡先

大学報事務局（法人事務部総務課）  
内線 5452、5453  
kouhou@j.iwate-med.ac.jp

## 医療専門学校歯科衛生学科のネームプレート交付式が行われました

10月7日（月）、内丸キャンパス歯学部4階講堂において、令和元年度歯科衛生学科ネームプレート交付式が行われました。ネームプレート交付式は、これから同学科の1年生が臨床実習を行うにあたり、医療人としての心構えや責任感を自覚し、決意を新たにするために行われます。

式では、実習着に身を包んだ学生34名の呼名に続き、三浦校長から一人ひとりに実習用のネームプレートが手渡されました。

厳かな雰囲気の中、学生を代表して千葉洸佳（ちばひろか）さんが「歯科衛生士としての役割と責任を実習の中で学んでまいります」と決意を述べ、歯科衛生士への第一歩を踏み出すことを誓いました。



## 第7回日本災害医療ロジスティクス研修が行われました

10月21日（月）～24日（木）の4日間、矢巾キャンパスの災害時地域医療支援教育センターをメイン会場に、第7回日本災害医療ロジスティクス研修が行われ、全国から55名が参加しました。

研修では、派遣目的地までの円滑な到達や衣食住の確保などロジスティクスの基礎のほか、通信断絶時における衛星携帯電話を利用した通信の確保等について学びました。また、県内沿岸部の保健所・役場・高校の各施設において大規模な災害を想定した実践的な訓練を行い、各拠点での本部の立ち上げと本部内におけるロジスティクスの役割、多組織間の連携について理解を深めました。



## 「TOMODACHI J&J 災害看護研修プログラム2019」の学内報告会等が行われました

看護学部3年の藤井萌々花さんは、公益財団法人米日カウンシル—ジャパンが主催する「TOMODACHI J&J 災害看護研修プログラム2019」に第5期生として参加しました。

本プログラムでは、将来の災害看護分野を牽引するリーダー育成を目的として、全国から選抜された看護学生10名が約半年間の研修を行います。参加学生は、事前の国内研修の他、2週間にわたる米国研修においてニューヨークとワシントンD.C.の災害医療や看護を専門とする施設や団体の訪問等を通じて最先端技術を学び、災害や有事に対応する知識や実践的スキルを身につけます。帰国後の事後研修では、米国研修での学びを基に自身で活動を企画・実施し、地域に還元する活動を展開します。

本学では、9月27日（金）、矢巾キャンパス東2-A講義室において、本プログラムに参加した藤井さんによる報告会が行われ、看護学部の学生ら51名が熱心に耳を傾けました。また、10月16日（水）には、矢巾キャンパスマルチ3-A実習室において、看護学部生を対象としたワークショップが行われました。藤井さんは、「米国では看護師が普段から地域住民とつながりをもって減災のための活動をしていた。日本は災害大国なので、いざ災害が起きたときに看護師の地域での役割は大きいと思う。このプログラムでの学びを今後にかかしていきたい」と力強く語り、参加した学生にとっても充実した時間となりました。



学内報告会（9月30日開催）



ワークショップ（10月16日開催）

## 学校法人岩手医科大学が 第72回岩手日報文化賞を受賞しました

本法人は第72回岩手日報文化賞を受賞しました。同賞は社会、学術文化、産業経済、体育などの分野で顕著な業績をあげた個人または団体を顕彰することを目的として1948年に制定されたものです。

主な受賞理由は、本法人が長年に亘り医師・歯科医師・薬剤師・看護師養成機関、特定機能病院として地域医療の中核を担ってきたこと、東日本大震災時は関係機関と連携し医療支援に尽力したこと、本年9月には附属病院を矢巾町へ移転・開院させるとともに大規模な患者搬送を無事成功させたこと、また、内丸メディカルセンターを同時に開院し、新時代の地域医療拠点の整備に努めたことなどです。

11月3日（日）、盛岡グランドホテルにおいて授賞式が行われ、今年の「文化賞」4団体、「体育賞」5個人・団体及び体育特別賞の「体育賞・未来」1団体の関係者らが参加。本法人からは小川理事長が出席し、岩手日報社の東根千万億（あすまねちまお）社長から表彰状、正賞（独鈷釜）、副賞（金三十万円）を受け取りました。

授賞式で小川理事長は「教職員、学生を代表して御礼を申し上げる。本学は120有余年の歴史の中で幾度となく廃校の憂き目に合いながらも先人の地域医療を守る強い意志、努力で難局を乗り越えてきた。9月には高規格の附属病院が開院し、岩手という地方で世界最高の高度医療を実践できることを誇りに思う。今後も県民、国民の信託を受けつつ、大学の発展に努力したい」と述べ、更なる飛躍を誓いました。



表彰者の集合写真（最前列左から2番目が小川理事長）



表彰状と独鈷釜

## 医大祭2019『たかが「僕」、されど「僕」。』 が行われました

11月2日（土）・3日（日）の両日、矢巾キャンパスにおいて、医大祭が開催されました。今回のテーマは『たかが「僕」、されど「僕」。』と題され、情熱と誇りを持ち、医療人として一歩ずつ成長していこうという意味が込められています。

各クラブが出店する模擬店や野外ステージでのイベントの他、キャンパス内では各学部による学術展示コーナーや公開実験、学生茶屋やミニコンサートなどの文化部の発表、体育館では、Ms.&Mr.コンテストが行われ、両日ともに多数の地域住民の方たちなど約1,000名の来場者で賑わいました。

また、実行委員の学生たちは、慣れない準備や調整で困難も多い中、医大祭を通じ学部の垣根を越えて繋がりを強くしたようです。



模擬店



軽音楽部による演奏発表



公開実験「ローリーを探せ！2019」



今回ご紹介するコースは、つなぎ温泉～鶯宿温泉の片道約10キロのコースです。歩道がよく整備されたのどかなコースで、街道沿いですが信号がほとんどなく自動車の通行量も少ないので気持ちよく走れます。

公共交通機関でアクセスする場合は、盛岡から岩手県交通の路線バスが繋温泉までは1時間に1本、鶯宿温泉までは2時間に1本運行しています。

どちらの温泉にも日帰り入浴施設や無料の足湯があるのですが、おすすめは鶯宿温泉の足湯です。鶯宿川の渓谷に面した開放的なロケーションで、利用者が少ないので高確率で貸し切り状態になるおすすめ穴場スポットです。

まずはつなぎ温泉の目の前にかかる赤い橋、繋大橋を渡って、御所湖の北側を回って鶯宿温泉方面へ。おそらく南側を回った方が近いのですが、北側の方が歩道がしっかりしていて安心して走れます。

御所湖の眺めを満喫しつつ御所大橋を渡って、突き当りの三叉路を右に曲がったら、あとは道なりにまっすぐで鶯宿温泉に向かう街道に入ります。

コースの中間地点あたりにAコープとローソンがありますが、ここから先はゴールの鶯宿温泉まで商店や

トイレがありませんから、休憩が必要な場合はここで済ませてしましましょう。私はジョギング中に飲むドリンク類が大好きなので、疲れてなくても寄ることが多いです。

鶯宿川沿いに入ると、コースはさらにのどかさを増して、しっかりした歩道は続いているのに、ほとんど人とは会わず、このコースはこれまで20回は走っていましたが、先月初めて自分以外のジョギングの人に会いました。ちょっと嬉しかったです。

鶯宿温泉のバス停をゴールに設定しましたが、街道沿いにぼつりぼつりと並ぶ温泉宿を通り過ぎれば、ゴールまであと少し。

余裕があれば走って帰ってもいいし、ひなびた温泉街と鶯宿川の渓谷を楽しみながら、のんびりバスを待ってもいいかもしれません。足湯はバス停の少し先にあります。

ちなみに、冬季は雪の有無にかかわらず、コース中の公衆トイレや自販機などが閉鎖されるのでご注意ください。



鶯宿温泉の足湯

つなぎ温泉の足湯

爽快な道が続きます

## 「令和元年度 尚綱会（岩手医科大学准教授・講師会）講演会報告記」

令和元年8月21日、創立60周年記念館8階研修室にて、尚綱会の講演会が開かれました。1982年アルベールビルオリンピック、スキーコンパインド団体金メダリストの三ヶ田礼一氏をお迎えし、「スポーツの魅力(ちから)～岩手から世界へ!～」と題してご講演を頂きました。岩手県では、2007年からトップアスリートとなる人材育成を目的とした“スーパーキッズ”事業に力をいれており、その成果について実例をもとにお話頂きました。

昨年度、スキージャンプワールドカップ総合優勝の小林陵侷選手は、この“スーパーキッズ”の1期生とのことで、驚きを隠せませんでした。

“スーパーキッズ”育成には、2つのスタンダード(目標基準)が設定されており、1つ目がパフォーマンススタンダードと言われる身体能力、2つ目がアスリートスタンダードと呼ばれる、挨拶や返事、正しい姿勢、身だしなみといった「人間力」を養う目標基準から成り立っているとのこと。身体能力だけではなく、「人」としての能力も重要であるとのことでした。

また、一つの競技だけではなく様々な競技に触れることで、一人ひとりの競技適正を評価し、より多くの子供たちの可能性を引き出すことも大切で、多くの子供たちの夢を叶えることが目標であるとお話されました。

講演の最後には、お持ち頂いたオリンピック金メダルを、みなさんと触ったり、写真を撮らせて頂くなど、大変有意義な1時間となりました。

(文責：尚綱会幹事長 口腔顎顔面再建学講座 歯科放射線学分野 泉澤 充)



集合写真(中央が三ヶ田氏)



アルベールビルオリンピックの金メダル

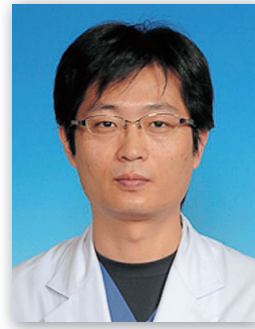
### 理事会報告 (9月定例－9月30日開催)

#### 1. 教員の人事について

医学部眼科学講座 特任准教授  
橋爪 公平(前 同講座 講師)  
医学部眼科学講座 特任准教授  
村井 憲一(前 同講座 講師)

(発令年月日 2019年10月1日付)

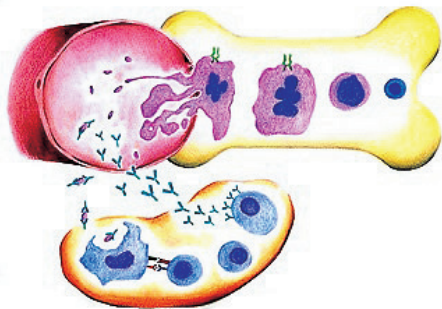
#### 2. 岩手医科大学附属病院規程の改正及び岩手医科大学附属内丸メディカルセンター規程の制定について



内科学講座血液腫瘍内科分野 講師 古和田 周吾

## 特発性血小板減少性紫斑病とは

特発性血小板減少性紫斑病 (ideopathic thrombocytopenic purpura) は、免疫学的機序により血小板減少を来す後天性疾患です。日本では2万5000人が罹患しており、難病に指定されています。現在、岩手県内で100名以上がいらっしゃいます。主な病態は、血小板に対する自己抗体が生じていることから、自己抗体に修飾された血小板が、脾臓内でマクロファージ等に貪食される為と考えられています (図)。



ピロリ菌やウイルス感染、妊娠、免疫作用薬投与 (インターフェロン、チェックポイント作動薬など)、など免疫系が刺激されるイベントにより、ITPの発症や増悪が見られます。

症状は、無症状 (健診や術前検査で血小板数低下を指摘)、軽微 (紫斑)、中等 (口腔内や鼻出血などの粘膜出血)、重篤 (頭蓋内出血、消化管の大量出血) まで段階があり、

出血症状の段階により治療開始のタイミングが異なります。一般的には血小板数が5万までは無症状で、軽微な観血的処置も可能な状態です。3万/ $\mu\text{l}$  前後まで低下すると、誘因なしに紫斑や粘膜出血 (口腔内出血、鼻出血) が出現する方ができます。血小板数以外に出血症状に重要な因子は、発症時期と血小板減少速度 (数週で急速に減少 (出血しやすい)、または数年前からゆっくり減少 (出血しにくい))、併用薬剤 (抗血小板薬、抗凝固薬は血小板数5万/ $\mu\text{l}$  未満で原則中止です)、年齢や合併症などがあります。

診断は、ITPに特異的な検査が無い為に除外診断となります。網状血小板比率が有用ですが、保険外検査の為に測定できる施設が限られており、施設間での診断の精度に問題が残ります (当科研究室で測定しております)。骨髓穿刺検査は必須ではありませんが他疾患の除外目的に行われることもあります。

治療は、始めにヘリコバクターピロリ菌感染がある方は除菌を行います (除菌により60%の方が血小板数の改善があります)。基本的には血小板3万または出血症状が出現するまでは無治療経過観察となります。他の疾患と同様に、個々の患者さんのリスク・ベネフィット比を考慮して治療方法と開始時期を選びます。ステロイド、トロンボポエチン作動薬、 $\gamma$  グロブリン大量療法などを使い分けます。

## 《岩手医科大学報編集委員》

小川 彰	佐藤真結美
影山 雄太	菊池 初子
松政 正俊	工藤 正樹
齋野 朝幸	及川 弘美
藤本 康之	安保 淳一
白石 博久	佐々木 忠司
成田 欣弥	畠山 正充
遊田由希子	藤村 尚子
佐藤 仁	武藤千恵子
小坂 未来	高橋 慶
藤澤 美穂	

## 編集後記

新病院が開院した矢巾の町はさらに賑やかさを増しています。

今月号の特集は、新病院で活躍なさっている認定看護師のお二人に執筆いただきました。認定看護師は現在全国に2万人ほど、岩手県内には200人ほどいらっしゃるようですが、そのうち48人もの方が本学の病院に勤務なさっているということで、とても頼もしく感じました。今後も様々な分野の認定看護師の活躍を記事にできればと思います。

(編集委員 成田 欣弥)

## 岩手医科大学報 第518号

発行年月日 令和元年11月30日

発行 学校法人岩手医科大学

編集委員長 小川 彰

編集 岩手医科大学報編集委員会

事務局 法人事務部 総務課

TEL. 019-651-5111 (内線5452, 5453)

FAX. 019-907-2448

E-mail: kouhou@j.wate-med.ac.jp

印刷 河北印刷株式会社

盛岡市本町通2-8-7

TEL. 019-623-4256

E-mail: office@kahoku-ipm.jp